

破れた繻

耳の物語
＊

開高健

破れた繭

耳の物語

*

開高 健

新潮社版

破れた繭 やぶ まゆ
耳の物語 みみ ものがたり *

著者 開高 健

昭和六十一年八月二十五日発行

昭和六十一年九月十五日二刷

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 大口製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一二 編集〇三(266)五四二

定価 一三〇〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

破
れ
た
繭

耳
の
物
語
＊

最高の書物とは、読者にわかりきっていることを語ったものだと、彼は悟ったのである。

G・オーウェル『一九八四年』

住む人もない廃屋があつて、衣裳簞笥がある。それにはカビの匂いがつまり、埃がつもつて黒くなつてゐる。そういう衣裳簞笥をあけてみると、ときどき古い香水瓶が見つかつたりするものである。栓をとると残香がたちのぼつてくる。それにふれた瞬間、昔の思出がよみがえる。魂がいきいきとよみがえり、ほとぼし進りでると、ボードレールは書いている。無数の蛹まなこのように闇のなかでふるえながら眠つていた記憶が、瞬間、紺碧に、薔薇色に、金色に輝やいて、眩暈のようにもどつてくるというのである。

マドレエヌ、またはプティット・マドレエヌというのは近年のわが国のちよつとした洋菓子店ならどこにでも見かけられる。ホタテ貝型のギザギザをつけた、ふつくらとした菓子パンで、齒あたりは軽く、さくさくと舌の上で崩れる。とりたててどうということもない、他愛ないお菓子であるが、異才の舌を通過すると一変する。この一片をお茶（菩提樹の花の薬湯）に浸し、スプーンで一匙すくつて口にはこんだ瞬間、異常な身震

いが全身を走ったと、ブルーストは記している。それまで潜在していたものが、夥しい過去が一瞬によみがえり、力強い飲びが全身を占めたそうである。それは、人生の有為転変に無関心になり、人生の災厄に平然となり、人生のはかなさを迷妄と悟らしめる“ほどのものであつたと書いてゐる。しかし、その強烈は最初の一口だけであつて、つぎの一口、そのまたつぎの一口にはすでに何もなかった、とも書いてゐる。

一人は昔の香水瓶から過去をとりだした。もう一人はお茶碗からとりだした。ほかに、酒瓶からとりだしたのもいるし、タバコからとりだしたのもいる。阿片からとりだしたのもいる。何もかも、あらゆる文体と発想で描きつくされてしまい、後世になればなるだけ小説家は身動きできなくなる。考えあぐねて月と年をかさねるうちに、やっと、耳だけはのこされているのではあるまいかと思ひあたり、耳から過去をとりだしてみようと思ひたつた。洗い忘れやすい、垢のつまつた一つの耳から一つの半生をこれからとりだしてみようと思う。人生の有為転変に無関心になれるほどのものに全身を占められることになるか。それともやつぱり闇のなかでふるえながら眠りこける蛹のままで終つてしまうか。性器の記憶をたよりにして一人の男の半生なり一生なりを述べる作品があるのなら、耳についてのそれがあつていけない理由は何かないか、と思われる。

*
*

一つの光景がある。

いつごろ、どこから、どうやってしのびこんできたものか、まさぐりようがない。それは、はにかみやすく、気まぐれで、敏感であり、意識や、言葉や、事件の背後にかくれている。呼べば出てくる、見ようと思えば見える光景ではなく、いつも登場するときには自身から時と場所と状況を選んであり、呼ばれたときや、選ばれたときではない。ひっそりした一人寝の寝さめのときにあらわれることが多いけれど、酒場でどんちゃん騒ぎをしているさなかにあらわれることもあった。憂鬱にひしがれて猫背になって白昼の映画館へ入っていくそのガラス・ドアのところでも出現したこともあるし、女の腹の上で汗まみれになっているときに出現したこともよくある。横顔だけ見せて消えたこともあれば、いつまでも正面にしぶとく謎めいて漂いつづけたこともある。パリのタバコ屋の店さきであらわれたことがあるし、ペルーの海岸砂漠の白暑のなかであらわれたことだってある。

それが消えたあとで、うつらうつらと後味を聞きながら、もうつきあいだしてから何

年になるのだろうかと考えてみる。よくそう考えて、指を折って数える気になるのだけれど、いつもわからなくなる。三十年になるのか。四十年になるのか。掌の筋に気がつくようになってから以後なのか。それよりもつと以前から出逢っていたもののなか。今感じているよりはもっと以後になってから遭遇するようになったのか。後味がいつもあまりにもほのぼのしているものだから、それにまぎれて何もわからなくなり、しぶとく食いさがって後追いつる気も起らなくなる。来るものは来るままに、去るものは去るままにということになり、そのことから焦躁も起らなければ、逡巡も起ることがない。いつ、どこで、どういう条件で出現するかわからないということでは、昔はずいぶんコレクションがあつた。たとえば酒に酔つて大声で棺桶の唄を歌いながら夜の海岸へおりていく海賊たちとか。木の蔓をつかんでジャングルの枝から枝へ飛んでいく裸の若者の肩さきの輝きとか。生きているほかの虫の体内に産みつけられてそのあたたかい、香りのいい、汁気のたっぷりある肉を寝ころんだまま食べつづけるハチの幼虫とか。おびただしい光景のコレクションがあつて、呼べばきつと見えてくるものだから、つらいことがあつても、なくても、きつと呼び出しをかけて逢つては別れ、別れては逢いしていたものだった。しかし、歳月のたつうちに、それらは、一つ、二つと、いつともなく、ほかの夥しいものといっしょに、どこかへ消えてしまった。しぶい痛みも感じさせず、甘い酸っぱさも感じさせずに消えていった。一つ一つ、あれほど忘我にさせてくれたものを、消滅したと知覚させられることもなく、失いつづけてきた。体が重くなつたのか。軽く

なったのか。それすらまぎれないうる。ときどきぴくりとふるえたり、愕然として自失することはあるのだけれど、骨にきざみこまれることがない。ときには渚に立つ足の下から砂が流失していくような甘美をおぼえることすらある。

いつ消滅するか知れず、二度と還ってくることはあるまいと濃く予感するのだが、玩具箱をひっくりかえしたような昔のコレクションのなかで、何もかも奪われてしまったのに、その一つの光景だけは何とか喘ぎ喘ぎも生きのびているようである。それは酔っぱらいの海賊や、うっとりしたハチの幼虫などといっしょにかつては共棲していて、登場するために先を争っていたものだった。海賊や幼虫はその光景とひしめきあいつつ、愉しげに、はげしく前後を争って登場し、明滅して、なぐさめてくれ、無言のうちに交歓しあい、小さな埃りまみれの窓ぎわの万年床に寝そべったままで拈華微笑しあえたものだった。しかし、海賊も消え、ハチの幼虫も消えてしまった現在、そうだとすっかりわかってしまったので、昔は選ばれるのを待つだけだったのに、今では何とかして任意のボタンを選ぶようにして呼出す方法はないものかと考えることがある。その心のあせりの一日か二日後に光景があらわれると、愉しさのあまり、ついに自身を制覇できるところになったかと、とんでもない自惚れをおぼえることがある。しかし、いくらあせってはげんでも何日たっても出遭えないということが連続するので、この自惚れもまた、泡のように消えてしまった。とどのつまり、少年時代前半、少年時代後半、青年時代全期、成年時代全期を通じてのよう、いつとも知れずやってくるのを待っているしかない、と、

悟ることとなった。二十年も三十年も昔のままに自然体でいるしかないのである。五十歳になっても。

生ですする50度のウォトカのせいで前置きがいささか長くなりすぎたようである。そろそろお鍋を熱くしなければならない。それは他の大半の私的な体験とおなじように言葉や文字で説明してみると、バカバカしさに作者がまっさきにペンを投げてしまいたくなるようなものである。その、いわくありげな、「一つの光景」とは、夕焼空の下のある都市の、下町である。長屋や、商店や、寺や、小さなビルのひしめきあう、繁華な下町の夕景色である。大きな通りがなだらかな坂道になっていて、町はその通りの両側に華麗なカビの大群として栄えている。心象の不思議のひとつは事物をつぶさに目撃しないのにあたかもひとつひとつ肉眼で見ているかのような感触を直下じげに味わえるところにある。その夕景色の下町は黄昏時という一日でもっとも活力にあふれる時間にあるのだから、おびただししい数の燈火、炊煙、人の声、人の姿、荷車、自転車、自動車などにみだされているはずなのに、そしてまさにそうだとありありと感知できるのに、眼をすえて見なおそうとすると、何もさだかには弁別できない。長屋の低い軒の下ではおかみさんたちが七輪に炭火を入れて金網をのせてサンマを焼いていると見え、その脂っぽい煙りが歓声となってたちのぼっていると見えるのに、さて凝視しようとなると見えなくなる。きれいに水をうたれて洗われたお寺の門前にはささやかな白木の柵がおいでであり、濡れ濡れした御影石の白と黒の小粒のゴマ斑ふがまざまざと見え、門内の植えこみにはツ

ツジかボタンかサザンカの赤い花のたわわもほの見える。路地裏で少女たちの甲ン高く澄んだ叫声がし、下駄の鳴る音、ネズミ火花のはねる音がする。それはまさしく夏の景物であるのに、空ではウィインン、ウィインンと大風の精悍な唸りがひびいて、真冬としかいようがないのである。一日の労苦から解放された男の帰宅を歓迎する妻と子供たちの口ぐちの叫声が、一軒、一軒の家の軒から香煙のように火花のようにはじけているのに、そのいきいきと充実しきった輝きと声々はつぶさに感知できるのに、人の姿がまったく目撃できない。空と、灯と、道と、家に、まぎれもない下町の、あけすけであらわな叫びと笑いがみちみちているのに、人の姿はまったく見ることでできないのである。冬の大風の唸りのふるえる初夏の大阪の下町。しかも歓声にわきたつ無人の町である。

ゆったりとした大通りの坂道の頂上からこの光景を見おろしている。ひとりではなくて、誰かに手をひかれている感触がある。その誰かの腰までもないという感触もある。誰かは母かも知れず、女中かも知れないが、もっとしばしば若かった叔母ではないかという感触が濃い。和服を着せられて夕方の散歩に出て、若い叔母に手をひかれ、その叔母はまだ女学生で、セーラー服を着ていたと、一片、感知できることもある。それはちらと見えて、ちらと消えてしまう。女学生の叔母は姉の息子、つまり甥の、よちよち歩きの病弱な、内向一途のはにかみ屋の、眉だけ長くて黒い、草の芽のような甥の手をひいて夕方の散歩に出かけ、途中で友人と出逢って長話にふけたのかもしれない。甥は

生まれたばかりのヒヨコのような眼で植物とも動物ともつかぬ状態のままで夕方の町の事物と、光彩と、空をまじまじと見とれていたのであろう。そして、これこそ重大な一点なのだが、たいていけだるい半覚半醒の時刻を選んでこの光景は出現する。その、肉と知の、外と内の、沈と昇の、潜在意識と顕在意識のせめぎあいの、どうかしたたまゆらの空白の瞬間、しばしばこの光景の訪問をうけ、そのたび毛布のなかで音楽を痛覚させられたことであつた。

大通りの坂道と、燦爛とした夕焼雲と、大風の唸りのなかの、この、初夏とも真冬ともつかぬ、一人の人の姿も見えない光景そのものがしばしば音楽となつて心と体をふるわせることがあるのだつた。万年床のなかに寝そべつたままで、ア、来タと思うと、そのまま音楽にゆさぶりたてられることがある。非情多感でありたいと思いつづけて、いつい、そう鎧づけてしまつた心をひとたまりもなくとろかして郷愁で湯浸しにしてみよう、晩秋の瞬間がある。あたたかく、はげしく、滔々、また、蕩々と、ひろく、ふかく、はげしく、ゆるやかにわきたち流れて、さからいようがない。来タ、と思つて何かの心の用意をしてから出遭えることもあれば、発作の出た瞬間に流し去られてしまふこともあつた。光景はまざまざと肉眼視できながら音楽なのだ。三十年か四十年にわたつて、それに何度、心身を浸したことか、数えようもないが、ついにペンでとらえることはできなかった。それは聞く光景であり、見る音楽でもあつたわけだが、一度として書くことができなかった。せめて五線紙にといらだつたことは何度となくあつたけれ

ど、楽譜を読むこともできなければ書くこともできないものにとつては記述のしようがないのだった。寝そべったままで身ぶるいしながら、ただそれがわきおこつて心身を浸し、やがて脊髄をつたつて消えていくのを見送るだけである。小説家が文盲になる経験はしばしば味わつたけれど、これは半生を一貫してのそれであつた。

年をとると眼が潤んだり、かすんだりする。とうとう動物園へいつても檻の鉄柵と虎の縞模様のけじめがつかなくなつた。奪^とられてしまつた。何もかも奪られてしまつた。昔、そういう唄をパリで一人の若い女が歌うのを聞いたことがあつた。真冬の初夏の町の光景と音楽も、近年、来訪が次第に間遠になりつつある。任意に呼出す方法がないので、ただ待つしかないのだが、ときどき待つということを忘れてしまつてゐるのに気がつくこともある。登場してきたときには珍しいなと思う氣持がさきにたつたりするが、光景はずつと小さくなり、遠くなり、おぼろになつてゐる。いつもきつと見えていたものやその場だけ臨時に見えるものがあつたのだが、どちらも少くなり、小さくなりつつあり、時間も短くなるばかりである。ときには芽生えたとたんに枯れてしまうこともある。音楽からは力強さが薄れ、ゆさぶりたてるような郷愁がしりぞきつつあると感ぜられる。やがて、聞くこともできず、見ることもできなくなる。遅かれ早かれそうなる。そうなたた日もわからないでそうなつてしまふのであらう。だから文盲と知りながらもはじめて書く努力をしてみようと思いきめたのだつた。

数年前、取材のためでも何でもなく、ふと思いたって大阪へいった。一週間ほどかかって寺町、阿倍野橋、寺田町、北田辺、南田辺、平野、八尾、高見の里、藤井寺、杉本町など、それらの界隈一帯を歩きまわった。それから大阪市内をあちらこちら、ついで奈良、和歌山、神戸、京都などを一週間、歩きまわった。かつて一步でも踏んだ記憶のあるところならどこでもと、思いだすまま、神経のそよぐままに歩きまわったのだった。生まれて育ったのは大阪であるが、それも二十五歳までで、あとは東京である。東京でもざっと二十五年間、暮したのだが、そのあいだにときどき大阪へ帰ることはあったけれど、いつも仕事にかこつけてであり、二、三日、滞在するだけで、せかせかと追いつてられるようにしてもどつてきた。物心ついてからはずっと、いつも、仕事があろうとなかろうと、何かの焦躁にせきたてられてきたような気がするので、大阪も東京も、そういうことではあまりけじめがつかない。それでいて、これまた、いつでも、どこでも、懈怠と分解の恐怖におびえていたようでもあるから、倒れるのが恐ろしいばかりにひたすら回転しつづけ、酔いつづけてきたのかもしれない。解体におびえて、とはいいいながら、